

わが図書館の新展開・札幌学院大学図書館

図書館地域開放のさきがけ

甲斐 陽輔
かい・ようすけ

地域に開放されている大学図書館とはどのような図書館だろうか。

地域の住民にもサービスをしているのだから趣味や実用関係の本も結構あるのだろうか。小学生だってやってくるかも知れない。館内を走り回ったりすれば学生の勉強の邪魔にはしないか、などとひよっとして想像されているとすれば、それは現実とかなり離れている。

地域に開放されている、地域住民にもサービスしていると言っても、その意味するところは、大学図書館でありながら地域住民の要求にも応えているということではない。正確に言おうとすれば、大学図書館の資料や施設を学習や

研究のために必要としている個人に対してその利用を拒んでいない、ということである。したがって、地域に「公開」していると言っても、地域に密着したサービスを別に展開しているわけでもないし、利用者の方も大学図書館の方が近くて便利だから、ということでも来館されているわけでもない。来館されているのはあくまでも大学図書館の専門的な資料やサービスと学習、研究上の接点をもつ個人である。そのような方たちは、大学や研究機関以外にも多くおられるのである。

地域開放の

経緯

本学図書館の地域開放は十六年前、一九七八年の現図書館オープンと同時にスタートしている。当時どのような議論がなされたかについては今日定かではないが、「深刻な議論もなく踏み切った」ところを見ると、公開講座や父母懇談会の実施といった当時の本学における大学開放の試みに沿うもので、違和感のないことだったに違いない。

また、図書館オープンの前年には既存の商学部に加えて人文学部、夜間に学ぶ学生のための商学第二部も開設されており、大学としての「勢い」も存在したかも知れない。当時の職員の平均年齢は二十八歳であった。そのようにして考えれば、まだ草創期の大学だったからこそ、当時とし

ては思い切った決断が可能であったと言えなくもない。

それから今日まで、地域開放は同じ様な形で続けられ、「地域住民にも定着」するまでになっている。

地域開放

きのう、今日

さて、大学の事情とは別に当時の公立図書館の状況はどうだったのだろうか。

本学のある江別市は現在は人口十万人を擁する札幌圏第三の都市である。本学図書館が地域開放に踏み切った一九七八年当時の江別市の人口は八万三千人、蔵書数は三万冊、人口百人あたりの冊数は三十六冊であった。この数字は北海道全体の平均四十四冊よりも低く、全国平均の五十冊からは更に低い数字であった。一方、その当時の札幌市は人口百二十八万七千人、蔵書数は二十九万八千冊、人口百人あたりの冊数は二十三冊であった。

それが、今日では江別市の人口百人あたりの蔵書数は一九七八年当時の五倍を越える、百九十五冊にまで達している。札幌市についても人口百人あたり八十七冊にまでなっている。また、江別市については一九八九年に、札幌市については一九九一年に待望の新図書館がオープンしている。以上の事から明らかのように、当時の大学図書館「公開」と今日における「公開」とでは客観的な背景が異なっている。今日からみれば地域の公立図書館の状況は同じよ

うに利用しやすいものだったとは言えないのである。そのためマスコミにも「人気、民間図書館―札幌商科大学、保険証提示でOK―」（北海道新聞一九八〇年十月二十四日付）などと書かれている。

しかしながら、これをもつて利用者が当時札幌商科大学（現札幌学院大学）図書館を公共図書館の代替施設のようにして利用したかどうかについては必ずしもそうとは言えない。なぜならば、地域の公立図書館と大学図書館では第一に資料構成が大きく異なっているし、大学図書館では学習・研究活動を専らに優先した資料・施設配置が行われているからである。また、大学図書館で趣味、実用、娯楽といった目的を満たすことは現在でも期待しがたいからである。

公共図書館との役割上の接点があったとしても、調査・研究のための機能との間にこそ有効な接点があっただろうし、今日その接点は一層拡がっている、と考える次第である。

総理府の実施した生涯学習に関する調査（九二年）の中では、学校に期待する事として、運動場、体育館、図書館などを開放する事が最も高い割合で示されている。本学図書館の開放もまた、こうした大学の公共性に期待されてい

る活動として館種を越えたネットワークの下で発展継続させていきたいと思っている。